2022年11月20日　　朝　礼　拝　順　序　(午　前　10　時　半)　　(№47)

司式　杉山昌樹牧師

前　　奏　　奏楽　森永美保姉

開　会　招　詞　　詩編１００編１－５節

＊ 賛　美　歌　　7:1（ソングシート）

1. 父の神よ 夜は去りて、新たなる 朝となりぬ。我らは今 御前に出て、御名をあがむ。アーメン

＊ 開　会　祈　祷

罪　の　告　白　祈祷書2　罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。　　主イエス・キリストの御名によって。アーメン。　(詩編51)

罪の赦しの宣言

十　　戒　　祈祷書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。　(出エジプト20、申命記5)

＊ 賛　美　歌　　7:2

2. 万有の主よ、御顔仰ぐ　僕らを 強くなして、天つ国の 尽きぬ恵みを　得させ給え。アーメン

5　使徒信条

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

われは、その独り子、われらの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりて宿り、おとめマリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よ

みに降り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。
かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。
われは聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒のまじわり、罪の赦し、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。　アーメン。

献　　金　　（黒）教会活動　（赤）中会伝道　　70

今献ぐるそなえものを　主よ　清めて受けたまえ　アーメン

聖　書　朗　読　　詩篇103編6－13節（旧約聖書940頁）

フィリピ2章1－5節（新約聖書362頁）

説　教・祈　祷　「励まされた時から」杉山昌樹牧師

＊ 賛　美　歌　３５:１，２

1. 十字架のうえに　屠られたまいし　こよなくきよき　み神のこひつじ、
わがため悩みを　しのびたまいし　み恵み　げにもとうとし。

2. 十字架のうえに　屠られたまいし　こよなくきよき　み神のこひつじ、
み救いあらずば　罪のこの身は、ほろびをいかでまぬがれん。アーメン

＊ 主　の　祈　り　　祈祷書1

天にましますわれらの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ　御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり　　アーメン。

＊ 頌　　栄　　６３

あめつちこぞりて　かしこみたたえよ、みめぐみあふるる　父、み子、みたまを。アーメン

＊ 祝　　祷

後　　奏　　（黙祷）

報　　告　　古澤兵庫長老（司会・受付　次週：門脇献一長老）

本日　受付　１階：那珂信之・星野房子執事　２階：藤井牧子執事　／ZOOMホスト・録音：雨宮信

次週　受付　１階：森永美保・加藤良明執事　２階：若月学執事　／ZOOMホスト・録音：大日南信也

※　グループ制により、長老も１階と２階に一名ずつ加わります。

フィリピ2：1－5「励まされた時から」

いよいよ問題が明らかに？

フィリピ書も今日からいよいよ2章に入ります。この所では、ついにと言いますか、パウロがかなり具体的な教会の問題に切り込んでいくところです。フィリピの教会は比較的にパウロとの関係がよかったようです。また、このフィリピ書では事あるごとに「喜び」ということが言われています。それは全くその通りですが、しかし、そうであっても教会に何の心配もない、ということはないようなのです。それは何も、フィリピの教会に限ったことではなく、例えば先週も大会があり、そこで懇談会、みんなで教会のこれからについて意見を出し合おうという時間が設けられました。そこで私たちの改革派教会の問題点として、献身者不足が指摘されました。牧師の成り手が順調に増えていないというのです。もっとも、それに対して議場からは、もっと他のことがあるかもしれない、との声もありました。これは、どちらも正しいのだと思います。しかし、そもそも、いつの時代でも教会には問題があったとも言えます。そして、それに対処する方法は、いつでも信仰の問題になります。とりわけ、このフィリピ書で示されております、「信仰の喜び」が問われるのです。

私の喜びを満たせ？

今日の個所の2節でもまさに「喜び」という言葉が登場します。「私の喜びを満たしてください」。とあるところです。この所だけを切り取りますと、まるで、パウロがわたしを喜ばせてくれ、と言っているように聞こえなくもありません。もちろん、パウロは、身勝手に、自分が嬉しくなるようなことをしてくれ、と言っているのではありません。ここで中心にありますのは「同じ思いとなり」という言葉です。教会に集う人たちみんなが、「同じ思いとなる」という言葉は、必ずしも、一つの考え方、一つの意見にまとまるですとか、とりあえず波風立てないように、不一致が明らかになって、気まずい雰囲気にならないように、一所懸命その場を取り繕う、といったことではありません。まして、教会が多様な意見を封じ込めてしまう、などということをするとすればそれは全く本末転倒です。では何か、と言いますと、実は、このところの言葉は、5節で語られております、互いに心がける、あるいは、イエスにもみられる、というところで使われている言葉と同じなのです。それでちょっと面倒な話をします。この5節の言葉をギリシア語から直訳するとたぶんこんな感じです。「あなたがたはこのことをあなた方の間で思い抱け。それは、キリスト・イエスにおいて（与えられている）」。ここで問題なのは、あなたがたが心に抱く「このこと」あるいはキリスト・イエスにおいて与えられている「それ」とは何だろう、ということです。実は、このところを文語訳聖書は大変興味深く訳しています。「汝ら、キリスト・イエスの心を心とせよ」。古い言い方ですけれども、意味は明らかです。イエス様の心を、心に抱こう、ということです。

皆が幸せでなければ

それで、パウロの幸せ、の話に戻るのですが、パウロが、「私の喜びを」という場合に、それは単にパウロが気分がよくなることではないのは当然です。そうではなくて、教会員の一人一人が「同じ思いを抱く」こと、すなわち、「イエス様が持っているような思い」で満たされていくことです。そこで何が起きるのかと言いますと、教会に集まる人たち皆が、イエス様と「同じ愛を抱き」、その点で「心を合わせ」、イエス様の愛に生きているという点で、「思いが一つ」になっていくのですから、それは実は、ほかでもない、教会員同士が幸せになっていくことそのものです。何しろ、みんなが、イエス様の思いを心に抱いているのですから。その場合には、そもそも、ここが問題だ、ここを直せ、というような話には、なって行かないはずなのです。そこでは、互いが互いを喜ぶ、幸せな教会が生まれていくのです。そのようにして、教会に集まる人たちそれぞれが、それぞれ受け入れ合って、幸せな群れとなっていくこと、これがそもそも、キリストの体のイメージなのですが、そのような教会ができていくことをパウロは望んでいるのです。そして、パウロが「私の喜びを」という場合それは、単純に、教会に集う人たちが、愛において結び付けられていく、そのようにしてみんなが幸せになっていくことです。そのことがパウロの救いとつながっていて、そしてまたパウロの「喜び」そのものなのだ、という意味です。まとめてしまえば、みんなが幸せになることがパウロの喜びです。

お互いをどう見るか
しかし、パウロはそのような幸せな群れを壊してしまいかねないものについて、3節で語り始めるのです。それは、物事の動機、心の中にあるものとしての、虚栄心や利己心だ、と言います。これはどちらも、信仰においてという意味です。もちろん、信仰以外の所でも、虚栄心や利己心は働くのですけれども、むしろ、パウロが問題にするのは、まさに、神様を信じる者たちの中で、特に信仰理解という点で働く虚栄心や利己心だというのです。イエス様を信じたのだから、そんなものは私たちの中にないのではないか、と思われるでしょうか。確かにその通りです。しかし、そこでよく考えてみたいのです。例えば、詩編にこんな言葉があります。「敵はわたしを苦しめようとして言います。「早く死んでその名も消えうせるがよい。」見舞いに来れば、むなしいことを言いますが／心に悪意を満たし、外に出ればそれを口にします。わたしを憎む者は皆、集まってささやき／わたしに災いを謀っています。「呪いに取りつかれて床に就いた。二度と起き上がれまい。」わたしの信頼していた仲間／わたしのパンを食べる者が／威張ってわたしを足げにします。」（詩編41：6－10）。「敵」という言葉が出てきます。しかし、この敵は「見舞いに来る」というのです。いや、そもそも、「信頼していた仲間、私のパンを食べる者」ですらあったようなのです。同じ神に仕えるもの同士の関係が、いつしかのっぴきならなくなってしまうということがあるという様子を詩編は示しています。ここが詩編の難しいところで、また、詩編を嫌いだという人がいる理由です。信仰者同士がいがみ合っている様子が見て取れてしまうのです。しかし、詩編に見られる信仰者の罪深い怒りはどこに行くのでしょうか。その行く先は一つしかないのです。人を苦しめようとする呪い、それに対して、神様にこの私を呪う人を呪って下さい、滅ぼして下さいと呪い返すような祈りをささげる、そのような私たちの中の醜い怒りの心は、十字架の上のイエス様に向かうのです。

あなたも私も愛されている
私たちが振り上げたこぶしが、イエス様を打つのです。そこで初めて、私たちは、自分の罪を知るのです。愛のなさを知るのです。そして同時に、私たちが赦されていることを知るのです。イエス様によって愛されていることを知るのです。そしてこのイエス様の愛の前では、私たちは、誰でも、平等なのです。4節にはこのように書かれています。「めいめい自分のことだけではなく、他人のことにも注意を払いなさい」。これはイエス様の愛との関係においてこそ考えたい言葉です。イエス様は、自分だけに味方して、自分だけによく取り計らってくださって、自分だけがイエス様を深く知っている、ということではなく、自分だけが恵みを持っているのではなく、むしろ、目の前にいるこの人にも、あの人にも、イエス様の恵みが届いている、いや、そこにこそ、イエス様の愛が現れている、そのことを注意深く見守ったらどうだろうか、そうすれば、自分だけが優れているとは思えないのではないか、むしろ、お互いのすばらしさがよく見えるのではないか、是非そのように思い定めて生きてほしい、本当のへりくだりとは、仲間のすばらしさに、今一緒に居る人たちのすばらしさに気付いていくことではないか、このようにパウロは言っているのです。

あなた方にすでにある
しかし、話はここで終わらないのです。このようにして互いの尊さに気付く、気づかされる、それは、私たちが自分で何とかするものではないということをパウロは、そもそもの今日の所の始めで語っていたのです。もう一度、1節を読んでみます。「そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、」。このあるのなら、という言葉が曲者です。「いくらかでもあるのなら」というと、ないんじゃないの、と言っているように聞こえてしまいます。しかし、このところは全く逆の意味です。この所で最後に登場します二つの言葉「慈しみや憐れみ」というのは、私たちが持っているものです。私たちの心の中に、生まれてきているものです。私たちの心の中に、このようなやさしさが、慈しみの心がもう生まれてきているでしょう、とパウロは言いたいのです。それは、どうしてかということを語るのがその前の三つの言葉です。

三位一体の交わり
それは、「キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり」の三つです。実は、ここでははっき

りと書いてありませんけれども、これは、全体で神様のお働きです。この所では、「愛の慰め」という言葉に神様が隠れているのです。神様が私たちを愛してくださるのです。そして、その神様ご自身が、私たちを慰めるために、キリストによる励ましを与えてくださっているのですし、それは、聖霊における私たちへの働きかけによって、毎日、毎日、今この時も、私たちの心の中に届き続けているのです。それが、霊の交わり、という言葉の意味です。このようにして、あなた方の心を神様ががっちりとつかんでいるのだから、あなた方の中に、慈しみと憐れみの心ができているでしょう、それを土台にして、それを共通の思いとして、その点で同じ思いとなって生きていってほしい、そうすれば、あなたがたがお互いを喜ぶことになって、それが実現することが、私の喜びになる、このようにパウロは勧めているのです。

同じ思い、一つの思い
今日は大会での懇談会の様子を最初にお話ししました。私たちの教会の現実を考えます時に、それは決して気楽にしていられる状況ではないかもしれません。いや、むしろ今の状況を何とかしなくては、という危機意識を多くの牧師・長老の方々が感じているのです。しかし、そこで、私たちがどうするか、ということを言い始める前に、どうしても必要なことがあります。それは教会を造り上げるものは何か、という問いです。ほかでもなく、教会とは私たち一人一人です。そして、私たち一人一人が、お互いを神様に愛されているものとして認めあい、喜び合うことによってはじめて、本当の教会が姿を表すのです。そして、そのための土台は、すべて神様が備えてくださっています。神様が私たちを愛して、私たちに与えて下さった「慈しみと憐れみの心」をもって私たちは、お互いを喜び、尊敬して生きていくのです。

励まされた時から
そのようにして、わたしたちが、イエス様の励ましを知れば知るほどに私たちの教会は真実な教会になっていきます。そして、そのような前進はどこまででも続けることができます。イエス様によって励まされていることによって、私たちは、この上福岡の地で、また、この近隣でイエス様の心を抱いて、イエス様の愛を地上に表す群れとなっていくことができるのです。

祈り
私たちを愛してくださる父なる神さま。あなたは、私たちをそれぞれ選び出し、あなたの御心のままに愛によって養い、一つの群れとして立て上げて砕いますから感謝します。私たちは、お互いがあなたに愛されたかけがえのない者であることを知っています。その通りに、わたしたちが互いのすばらしさを喜び合い、仕えあう群れとしていよいよ整えられていくことができますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン